

ヘミングウェイ 作「日はまた昇る」新潮文庫、新潮社 1955年2月15日刊を読む

「アフション(情熱)」と、「アフシオナード(闘牛に情熱をかたむける人)」とは

- モントーヤは、ぼくの肩に手をかけた。

「では、あちらでお会いしましょう」

- 彼はまた微笑した。いつも彼は、まるで闘牛がぼくと彼との特別な秘密でもあるかのように微笑するのであった。いわば、この残酷ではあるが、きわめて深い秘密を、彼とぼくだけで分かっているとしてもいったふうに。第三者には、この秘密は、何かいやらしいものに見えるかもしれないが、ぼくと彼だけは、よく理解しあっているといったような微笑だった。わからないものには、説明したってしょうがない、と言っているような微笑だ。

「このお友だちも闘牛が好きなんですか？」モントーヤはビルのほうに笑顔を見せた。

「そうだよ、わざわざニューヨークから、このサン・フェルミネスのお祭りを見にきたくらいだからね」

「そうですか」モントーヤは、いんぎんではあるが、信じられないといった調子で言った。

「でも、あなたほど闘牛好きじゃありませんね？」

彼はまたしても、きまりわるそうに、ぼくの肩に手をかけた。

「そんなことはないさ」とぼくは言った。「この男も本物の闘牛愛好家なんだ」

「それでも、あなたの闘牛アフシオナード好きとはちがいますね」

アフションというのは情熱という意味だ。アフシオナードというのは闘牛に情熱をかたむける人という意味だ。いい闘牛士は、みなモントーヤのホテルに泊る。もう一ついうなら、ほんとうの「闘牛愛好家」は、みんなここに泊るのである。金もうけ目あての闘牛士も、一度くらいは泊るが、そういう連中は、それっきりもどってこない。いい闘牛士は毎年泊る。モントーヤの部屋には彼らの写真があった。それらの写真はファント・モントーヤか彼の妹にささげられたものだった。モントーヤが心から信頼している闘牛士の写真は額に入れてあった。アフションのない闘牛士の写真は机の引出しに入れてあった。そういう写真にもお世辞たっぷりの献辞が書きこまれていた。けれども、そんなものには、何の意味もなかった。ある日モントーヤは、そういう写真をとりだして、くずかご屑籠へ投げこんでしまった。そばへおいておくのがいやになったのだ。

- モントーヤとぼくは、闘牛と闘牛士について、よく語りあったものだ。ぼくは、ここ数年、毎年モントーヤのところに泊っていた。だが、長いこと話しこむということはなかった。めいめい感じていることをたしかめあうよろこびだけで十分だった。遠い町からきた人たちも、パンプローナを去る前には、ちょっとここへ足を運んでモントーヤと話をしていたが、こういう人たちがアフシオナードなのだ。アフシオナードなら、どんなにホテルが満員のときでも、部屋を都合してもらえた。モントーヤは、そういう連中の何人かをぼくに紹介してくれた。彼らはみな、はじめは非常にいんぎんで、ぼくがアメリカ人だと聞くと、ひどく珍しがった。どういふものか、アメリカ人にはアフションはないと思こんでいるようだった。アメリカ人は、アフションをもっているふりをしたり、興奮を情熱アフションと混同したりしているが、本物の情熱アフションは持てない人種だ、と思って

いた。ぼくがアフィシオンをもっていると知ったときでも、その証拠を引き出すような合言葉や一定の質問をするわけではなく、むしろ控え目な、けっして露骨でない問いかけによって、一種の口頭による精神的試験を行なっただけだった。彼らは、そんなときには、かならず遠慮深くぼくの肩に手をかけたり、「いい人だ」と、つぶやいたりした。ほとんどかならず実際にこちらのからだに手を触れた。たしかめるために手できわってみるといったふうだった。

- アフィシオンのある闘牛士なら、モントーヤは、どんなことにも寛大だった。発作的な行動も恐怖も、わけのわからぬ愚行も、あらゆる種類の不始末も、みな寛大に許した。アフィシオンのある人間なら、どんなことでも許そうとした。だから彼は、ぼくの友人たちを、みな寛大に受入れてくれた。彼は、何も言わなかったが、ぼくの友人たちは、ぼくと彼のあいだでは、いささか恥ずかしい代物しろものだった。いわば闘牛のときに牛に突かれた馬が腹から出すものと同じような代物だった。

P187 ~ 189

<コメント>

物語の後半は、スペイン・バスク地方、サンセバスチャンや闘牛についての理解には絶好の作品。綿密な取材に基づいた名作。

2022年12月18日(日)林明夫